

# 大学生のアサーティブな自己表現と文化的自己観

佐藤 哲 康\*

## Assertive Expressions and Cultural Views of Self in University Students

Tetsuyasu SATO

### 要 旨

本研究では大学生の自己表現の構造を確認し、アサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の識別について検討した。その結果、アサーティブな自己表現は「自己受容・自己信頼」「正当な権利主張」「断る意思の表明」の3因子構造になることが明らかになった。また攻撃的な自己表現の識別については曲線的な相関関係を示し、アサーティブな自己表現を苦手としている群では攻撃的な自己表現との識別がうまくいかずにアサーティブな自己表現のなかにも攻撃的な自己表現が含まれている。一方、アサーティブな自己表現が身につけている群では攻撃的な自己表現との識別ができており、アサーティブな自己表現をすることで攻撃的な自己表現を抑えていることが明らかになった。

さらにアサーティブな自己表現と2つの文化的自己観の関連について性差も含めて検討した。相互独立的自己観とアサーティブな自己表現の関連について、性別と相互独立的自己観の主効果が認められた。女性は男性よりも、相互独立性は高いほどアサーティブな自己表現を選択することが認められた。また相互協調的自己観とアサーティブな自己表現の関連について、相互協調的自己観と性別の交互作用と性別の主効果が認められたが相互協調的自己観の主効果が認められなかった。つまり、アサーティブな自己表現には相互協調性との関連が低いように思われる。

キーワード：自己表現, 文化的自己観, アサーティブネス, 攻撃性と受動性

日常の対人関係で生じる葛藤場面は、相手との相互作用によって葛藤の解決が図られる。このような場面は対人相互作用場面と呼ばれ、そこでの認知と行動を含む自己表現は「アサーティブな自己表現 (assertive)」, 「攻撃的な自己表現 (aggressive)」, 「受身的な自己表現

---

\*助教 臨床心理学

(passive)」に分けられることが知られている(佐藤, 2003)。Alberti & Emmons (2008) や平木 (2008) は、アサーティブネス (assertiveness) を平等な人間関係を促進する基本的権利として位置づけ、自分の感情を無理なく、素直に表現し、人の権利を侵害することなしに自分の権利を行使することと定義した。菅沼 (2011) は攻撃的な自己表現を「自己の欲求・感情・権利を優先させ、他者のものを後回しにする自己表現」、受身的な自己表現を「自己の欲求・感情・権利を後回しにし、他者のものを優先させる画一的な自己表現」と定義して、自他尊重の姿勢と態度が欠けている不健康なものであると述べている。

アサーティブな自己表現は、その内容について、自分・相手への賞賛と賛同、成功を認めること、感謝を伝えるなど肯定的な内容を表現する「ポジティブな自己表現」と異なる意見の表明、不快感や不満、怒りの感情表出、外部からの要求を断るなど、否定的な内容を表現する「ネガティブな自己表現」の2つに分けることができる。Ree & Graham (1991) はアサーティブな自己表現の具体的な応答パターンを分類し、(1)「いいえ」と言える能力、(2) 援助を依頼する能力、(3) 肯定的・否定的な感情を表現する能力、(4) 一般的な会話を開始・維持し、終結する能力の4つをアサーティブネスとして操作的に定義した。対人相互作用場面での不安の抑制に必要な行動スキルの獲得を目的に欧米で開発されたアサーティブネスは近年、行動面よりも人間性心理学的立場から信念や態度といった認知面の変容を重視している。

大学生を含む青年期においては親からの精神的な自立という課題に直面し、友人関係がより重要なものになる。特に重要な意味を持つ友人との対人相互作用場面での自己表現の特徴を検討し、健康でアサーティブな自己表現の選択を援助することは極めて有効である。石川・小林 (1998) は、社会性を急速に獲得する児童期にはソーシャルスキルが、対人関係上の不安を抱えやすい思春期・青年期ではアサーティブネスが重要であると述べている。

しかし伊藤 (2001) は、アサーション・トレーニングを通して英米との文化的差異を含めた日本におけるアサーション像を提示し、英米とはコミュニケーションのあり方がかなり異なり、アサーティブネスも同じではないことを指摘している。英米でのアサーティブネスが行動表出を前提としているのに対し、和を重んじる日本の文化では必ずしも行動表出を推奨していないこと、また行動表出を目指すばかりに相手が発言する機会の保証や粘り強く歩み寄り、納得のいく妥協点を見出す姿勢などの不可欠な要素を欠き、攻撃的な自己表現をアサーションと誤解していることが多いと述べている。

文化的に和を重んじる日本の風土の中では、個を主張することは集団からの逸脱を意味し、余程の覚悟がないとできないこと、さらにこうした厳しい規範が暗黙の形で、しかも強い拘束力を持っていることが柏木 (1992) により指摘されている。しかし、個を主張することと集団

の和を維持することは対立するものではなく、本当の協調関係とは「相手の言い分を良く聞いて尊重すると同時に自分の考えを伝え生かし、協調的な結果を生むことである」と飯長（1995）は考える。欧米で発展を遂げたアサーティブな自己表現を身につける場合、日本文化の特徴を理解したうえで適切なプログラムを実施する必要性があることを佐藤（2007）は指摘している。

アサーティブネスを日本という文化的風土の中に定着させようとする時、人間関係における状況理解がきわめて重要なものとなるに違いない。例えば、玉瀬・馬場（2003）は対人関係において同じ状況におかれても、それに関わる対象が異なることで行動を抑制したり、促進したりする場合には“場を認知している”からであると考えた。日本では「場」を認知し、その場にふさわしく振舞うことが円滑な人間関係を築く上で重要であると考えられる。

様々な行動は環境と個体特性、文脈（context）によって強く規定されるなど、日本人の行動はごく親しい人たちとそうでない人とでその態度や行動が大きく異なることが指摘されている（土居，1971；小此木，1979）。自己は単一不変ではなく、関係や文脈に応じて多面的かつ可変的であるという考え方が取り入れられつつある。

様々な人と関わりながら生活している中で、他者と一緒にいる時の自己、つまり関係的自己が実際の関係に応じてどの程度変化するのか、自己が関係に応じて多面的かつ可変的であるということが前提になり（佐久間，2000；佐久間・無藤，2003）、女子大学生の約90%が関係に応じて自分が変化すると考えていることが示されている（佐久間，2002）。

日本人のこのような特徴的な行動傾向、相手に応じて態度や行動を使い分けることは、自己呈示の理論が示すことと合致している。自己呈示とは社会的行動における演技的側面に関する概念であり、相手に与える印象に注意を払い、統制しようとする行為であると定義される。特に相手に与える印象に気を遣う際に行われるものとして考えられてきた。親や親友など、特に相手が自分に対して抱く印象を気遣う必要がないと思われるようなごく親しい人間関係でも、それぞれの相手に応じて見せたい自分のイメージを使い分けることが長谷川（2005）により示されている。

関係や状況による自己の変わりやすさと心理社会的適応との関連について、自己が関係や状況に応じて変化することを柔軟で適応的な能力の現れであると考える一方で、そのような変化を自己の不安定さや一貫性のなさとして捉え、自尊心の低さや不適応感と関連することも明らかになっている（佐久間・無藤，2003）。これらの結果を踏まえると心理社会的な適応との関連では、単に関係に応じて自己が変化することが重要とは言い切れず、相手とうまくやっていくために必要な柔軟で適応的な能力として理解されるかもしれない。

### 文化的自己観に関する先行研究

アサーティブな自己表現を日本において定着させようとする場合、文化的特徴と差異について考慮する必要があることは先に述べた。日本人の文化的特徴を説明する理論として、Markus & Kitayama (1991) は文化的自己観を挙げている。文化的自己観とはある文化において歴史的に共有された人間観あるいは自己像の文化差を比較文化心理学の立場から検討したもので“相互独立的自己観”と“相互協調的自己観”に大別される(北山, 1994; 北山, 1998)。相互独立的自己観は西洋文化で優勢な自己観であり、自己は他者や周囲と明確に区別され、それぞれが分離・独立した考えや生き方を持ち、表現することが文化的に認められた自己像で、他者から分離した自己の独自性に価値が置かれている。一方、相互協調的自己観は日本を含む東洋文化で優勢な自己観であり、自己は社会的集団と根本的に結びついた構成要素の一部で、自己と他者との境界があいまいであり、状況やその場の他者との関係性によって自己が規定され、さらに他者との調和に価値が置かれる自己像である。相互協調的自己観では集団目標と協調的な行動に関心が高く、対人関係の維持が主要な目標であり、個人の成功よりも重視される。それぞれの文化において優勢なこれらの自己観は、様々な日常的現実反映され、文化の中で育まれる人々の心のあり方を規定する(橋本, 2011)。このように相互独立・協調的自己観は、西洋と東洋それぞれの文化に共通する自己観として提示されるが、Markus & Kitayama (1991) はある文化の下で“優勢な”自己観と表現しているように、特定の文化で一方の自己観だけが見られるというわけではない。文化的自己観はある文化の下にいる人々全ての行動を直接規定しているわけではなく、それをそのまま受け入れるか、それに反対する形で受け入れるかというように間接的に影響を与えるものである。このような立場は自己観を個人差として捉えており、自他のあり方についての理解が自己表象(スキーマ; schema)の一部として概念化されており、ある個人内において相対的に優勢な自己観がその人の行動を規定するのだと論じている(高田・大本・清家, 1996)。木内(1995)や高田(1999a)は、これら両方が個人内に形成されていると考え、自己概念内における相対的な優勢性が社会的行動の個人差を生じさせると主張しており、同一文化内での研究を行なっている。橋本(2011)は特定の文化に優勢とされる人間観や自己像と、文化において育まれる個々人の心のあり方や行動が互いに影響しあうと同時に、文化的に形成された心を備えた個人が、その文化に関することで文化そのものを維持されるプロセスを論じている。

また文化的自己観について、公的自己意識を媒介して自己卑下の行動などに影響を与えている可能性(北山, 1998)や日本人が同調の自己呈示を多用している可能性についても示唆されている(長谷川, 2005)。日本的な自己呈示行動として、謙遜行動(自己卑下や自己批判など)

を挙げることができる。吉田・古城・加来（1982）は小学校低学年の頃から謙遜行動を肯定的に感じていることを示し、日本人は幼い頃から自分を控えめに見せることをその社会の中で学習し、身につけていると言える。自己卑下的な傾向は個人に優勢な自己観に関係なく見られ、自己呈示的な動機によらない、より内在化された認知的傾向となっているのではないかという指摘もあり、その傾向は日本文化が強調する相互協調的自己観が個人差としても優勢な人の中で顕著に見られた。文化的自己観がまず文化的な価値観として影響を与え、その文化を受け入れる（反発する）という形で個人差として影響を与えるという、二重の影響過程があるとする仮説を支持する結果である（長谷川，2005）。また発達の視点から考えた場合、自己の再構成期である青年期に日本文化に特徴的な自己のあり方が伸張する可能性が示唆され、小・中学生や成人に比べ高校生・大学生は相互協調性が強いことを示す研究もある（高田，1999b）。

相互協調的自己観が優勢な人は、示したい理想自己と実際に示している現実自己のイメージを状況に応じて変化させていることが明らかことから、文化的自己観の理論を自己概念まで拡張して位置づけることができる（長谷川，2005）。相互協調性（高田，1999a；高田・大木・清家，1996）が優勢な人は、自己が様々な関係の中に埋め込まれていると仮定することもでき、相手や状況に応じて自己が変化することに対して、自己を偽るという否定的な意識よりも、当然や自然といった肯定的な意識が見られると考えられる。関係の自己の可変性を理解するには変化の程度だけでなく、その動機や意識を探ることが重要である（佐久間・無藤，2003）。

例えば演技隠蔽とは他者からの評価を気にして、演技したり隠したりすることで、相互協調性が優勢な人は、他者との関係を維持するために自己がうまく変化できなかった場合、変化に対して不安感や嫌悪感を抱くために否定的意識を持ちやすいと考えられる。一方、相互独立性が優勢な人は、自己を関係と切り離して考える傾向が強いため、変化に対して不安感を抱きにくい（佐久間・無藤，2003）。

## 本研究の目的

アサーティブな自己表現に関する研究も多く、様々な方法でアサーティブ行動を測定する試みがなされている（高橋，2006）。しかし、従来のアサーション尺度による測定方法では健康でアサーティブな自己表現と不適切で不健康な攻撃的自己表現の識別が困難であることが指摘されている（玉瀬ら，2001；古市，1995）。また濱口（1992）は、自己報告式の質問紙では社会的な望ましさの要因の影響と回答の予測が可能であることを問題点として指摘している。

そこで本研究では従来の課題であるアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の識別に重点をおいた尺度を用いて、大学生のアサーティブな自己表現と文化的自己観の構造を確認す

る。また自己表現の差異について、アサーティブな自己表現と2つの文化的自己観の関連について検討することを目的とする。

## 方法

### 調査協力者

都内私立大学と千葉県私立大学の大学生350名を対象に以下の2つの調査を質問紙法で実施した。本研究では、不備のある回答を除いた335名（男性168名，女167名，平均19.16歳（SD=1.26））を調査対象とした。

### 調査内容

**自己表現** 菅沼（1994）や佐藤（2003）のアサーティブ行動尺度を参考に従来の課題である健康なアサーティブ行動と不健康な攻撃行動の識別に重点をおいて作成した“対人自己表現尺度”を用いた。尺度は「隣の人が周りに迷惑なことをしています。」など26の対人相互作用場面に対して、アサーティブ・攻撃・受身の自己表現を“全くしない（1）”から“しばしばする（5）”までの5件法でそれぞれ評定する（78項目）。得点が高いほどそれぞれの自己表現を多く選択していることを意味する。

**文化的自己観** 文化的自己観の測定尺度には相互独立的・相互協調的自己観尺度（青年・成人用：高田ら，1996）や独立・相互依存的自己理解尺度（木内，1995）が作成されている。本研究では調査協力者の属性から相互独立的・相互協調的自己観尺度（青年・成人用）を用いた。尺度は相互独立性10項目と相互協調性10項目，合計20項目で構成されており，“全く当てはまらない（1）”から“とても当てはまる（5）”までの5件法で評定する。

## 結果と考察

### 1) 対人自己表現尺度の検討とアサーティブな自己表現の因子構造

本研究で実施した対人自己表現尺度の信頼性と内的一貫性を検討するために3つの自己表現尺度それぞれの項目分析を行った。その結果，それぞれの尺度で十分なItem-Total相関と $\alpha$ 係数（assertive=.864，aggressive=.888，passive=.880）が得られた。

大学生のアサーティブな自己表現と文化的自己観

次いで大学生のアサーティブな自己表現の構造を明らかにするために対人自己表現尺度の中からアサーティブ尺度の因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行い、因子負荷量が0.3に満たない5項目を削除し（「2：仕事が沢山ある時、みんなで分担するように提案することができる」「15：一度決心したことは最後までやり通すことができる」など）、再度分析を行った結果、3因子解を採用した（Table 1）。

Table 1 アサーティブ行動尺度の因子分析（主因子・プロマックス法）

	自己受容・ 自己信頼 $\alpha = .768$	正当な 権利主張 $\alpha = .782$	断る意思の 表明 $\alpha = .666$
8：面接などを受ける時でも、自分らしく振る舞える	.841	-.166	-.035
3：大勢の前で発表する時、縮こまらず大きな声で話すことができる	.738	.011	-.139
17：初対面で面識のない人達の中でも自分らしく振る舞える	.635	.065	-.138
13：他人と異なった意見や感じを持っている時、そのことを表現することができる	.497	.009	.135
7：自分が知らないことや分からないことがあった時、説明を求めることができる	.497	-.028	.253
25：自分の自慢や長所・成功を人に言うことができる	.355	.208	-.221
23：目上の人の意見に反対の時、自分の考えをはっきり言うことができる	.345	.263	-.101
18：議論において、自分の意見を言い出すのを控える方である（※）	-.337	.087	-.080
10：自分が並んでいる列に割り込みをされた時、注意（抗議）ができる	-.103	.760	-.003
22：自分より後から来た人に先を越されてサービスをされた時、そのことを伝える	.017	.685	-.285
19：人が非常にずるいことをした時、それをきちんと指摘できる	.059	.573	.128
20：人に物やお金を貸してなかなか返ってこない時、返してくれるように頼める	-.254	.539	.234
1：迷惑なことをしている人がいる時、そのことを相手に伝え、やめてくれるように注意できる（頼むことができる）	.173	.510	-.072
14：約束を破られた時、その人に自分がどんな気持ちだったか伝えることができる	.039	.451	.120
16：自分が不公平に扱われた時、異議を唱えることができる	.134	.405	.211
21：販売員が熱心に勧める時、欲しくない製品でも「いらない」と言うことが難しい（※）	.149	.154	-.615
6：相手が自分に対して不当な要求をしてきた時、はっきり拒否することができる	.116	.115	.589
12：押し売りを断ることができない（※）	.127	.016	-.574
5：自分に関係あることを事前に了解や承諾なしに決められた時、異議を唱えることができる	.250	.108	.430
4：遊びや飲み会などへの誘いを受けたり、断ったりすることができる	.250	.033	.381
（※）逆転項目	自己受容・ 自己信頼	正当な 権利主張	断る意思の 表明
自己受容・ 自己信頼	1		
正当な権利主張	.585	1	
断る意思の表明	.412	.553	1

アサーティブな自己表現は“8：面接などを受ける時でも、自分らしく振る舞える”や“3：大勢の前で発表する時、縮こまらず大きな声で話すことができる”などの「自己受容・自己信頼（第1因子8項目； $\alpha=.768$ ）」，“10：自分が並んでいる列に割り込みをされた時、注意（抗議）ができる”や“22：自分より後から来た人に先を越されてサービスをされた時、そのことを伝える”などの「正当な権利主張（第2因子7項目； $\alpha=.782$ ）」，“21：販売員が熱心に勧める時、欲しくない製品でも「いない」と言うことが難しい（※逆転項目）”や“6：相手が自分に対して不当な要求をしてきた時、はっきり拒否することができる”などの「（依頼や要求を）断る意思の表明（第3因子5項目； $\alpha=.666$ ）」からなることが明らかになった。佐藤（2003）は「権利主張」「自己信頼」「断る能力」と名づけた3因子の構造を報告しているが、本研究も差異が認められず同様の構造であることが確認された。アサーティブな自己表現は、潜在的（カバート；covert）な認知面としてのアサーティブ・マインドと顕在的（オバート；overt）な行動面としてのアサーティブ行動に分けられる。本研究の「自己受容・自己信頼」は認知面、「正当な権利主張」と「（依頼や要求を）断る意思の表明」は行動面のアサーティブネスに該当する。

## 2) 自己表現の識別

先行研究では健康でアサーティブな自己表現と不健康で攻撃的な自己表現の識別の難しさが指摘され続けてきた。そこでアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現、受身的な自己表現、3つの自己表現相互の関係を明らかにするために対人自己表現尺度それぞれの合計得点を元に調査協力者全体とアサーティブの高低それぞれで相関分析を行った（Table 2）。

その結果、調査協力者全体ではアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の相関が $-.006$ と有意な関係は認められず、アサーティブな自己表現と受身的自己表現の相関は $-.622$ と有意な関係が認められた。

Table 2 アサーティブ行動得点による3つの自己表現の相関

	調査対象全体 (n=335)		Assertive 低群 (n=171)		Assertive 高群 (n=164)	
	Aggressive	Passive	Aggressive	Passive	Aggressive	Passive
Assertive	-.006	-.622**	.258**	-.397**	-.156*	-.505**
Aggressive		.118*		-.041		.274**

\*  $P < .05$  \*\*  $P < .01$



しかしアサーティブな自己表現の高低それぞれで相関を分析した結果、アサーティブな自己表現が低い群ではアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の間で .258 の正の相関、受身的自己表現との間で  $-.397$  の負の相関と有意な関係が認められた。またアサーティブな自己表現が高い群ではアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の間で  $-.156$  の相関、受身的な自己表現との間で  $-.505$  の負の相関、攻撃的な自己表現と受身的な自己表現の間で .274 の有意な正の相関がそれぞれ認められた。

これらの結果からアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の関係には単純な相関ではなく、平均を頂点とする曲線的な2つの相関関係が明らかになった。アサーティブな自己表現を苦手としている Assertive 低群では、アサーティブな自己表現の代わりに日常生活では受身的な自己表現を選択していると思われる。またアサーティブな自己表現を選択した場合には誤って攻撃的な自己表現も含まれていることが明らかになった。このことはアサーション・トレーニングを受けた参加者が示す一時的な結果を表しているかもしれない。トレーニングの希望者は受身的な自己表現の持ち主が多い。受身的な自己表現から主張的な自己表現になる場合には、アサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現が混在している状態になり、攻撃的な自己表現へと極端に変容する。その後、対人相互作用場面で経験を重ねるに従って次の段階であるアサーティブな自己表現と攻撃的な自己表現の識別を獲得すると考えられる。

トレーニングの成果が攻撃的にならないような感情教育と実践が必要になる。また、アサーティブな自己表現が身につけている Assertive 高群では攻撃的になることではないと理解しているので、さらにアサーティブな自己表現を身につけることで攻撃的な自己表現との識別ができるようになるのであろう。

調査対象全体のアサーティブな自己表現と受身的な自己表現の間で負の関係が認められたことは、対人相互作用場面に働きかけるアサーティブな自己表現と内部へ閉じ込める受身的な自己表現の識別がアサーティブな自己表現を獲得しているか否かに関わらず可能であったことを示している。更にアサーティブな自己表現が身につけている Assertive 高群では攻撃的な自己表現と受身的な自己表現の間で正の関係が認められた。アサーティブな自己表現が身につけている Assertive 高群では健康でアサーティブな自己表現と不健康で受身的な自己表現の識別はもとより、攻撃的な自己表現と受身的な自己表現の識別も可能であったことを示している。

### 3) 2つの文化的自己観の構造とアサーティブな自己表現との関連

本研究の2つめの目的は2つの文化的自己観との関連について検討することである。まず初めに2つの文化的自己観の構造を明らかにするために相互独立的 - 相互協調的的自己観尺度（青

年・成人用)の因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。因子負荷量の低い1項目(「21:私は自分の気持ちに正直な態度をとる」)を削除し、再度分析を行った結果、高田ら(1996)などの先行研究に基づいて4因子解が妥当であるため採用した(Table 3)。相互独立

Table 3 相互独立・相互協調的自己観尺度の因子分析(主因子・プロマックス法)

	【協】他者 との調和 $\alpha=.710$	【独】独断 性 $\alpha=.708$	【協】他者 評価懸念 $\alpha=.727$	【独】個の 認識・主張 $\alpha=.654$
23:どのようにしたら周りの人に喜んでもらえるかをまず第一に考える	<b>.806</b>	-.007	-.082	.014
12:人から好かれることは自分にとって大切である	<b>.580</b>	-.070	.163	.084
10:仲間の中での和を維持することは大切だと思う	<b>.566</b>	-.099	.050	.076
22:人と意見が対立した時、相手の意見を受け入れることが多い	<b>.483</b>	-.021	-.103	<b>-.312</b>
16:周りの人から期待される役割を果たすにはどうしたら良いかまず第一に考える	<b>.451</b>	-.015	.148	.206
14:自分がどう感じるかは、一緒にいる人や状況によって決まると思う	<b>.338</b>	.201	.022	-.058
20:相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることができる	<b>.324</b>	.080	.044	.114
7:自分の周りの人が異なった考えを持っていても自分の信じるところを守り通す	-.102	<b>.612</b>	.113	.060
9:たいしては自分一人で物事の決断をする	.010	<b>.585</b>	-.016	-.074
3:一番最良の決断は自分自身で考えたものであると思う	.117	<b>.525</b>	.041	-.048
11:周りの人の反対を受けても自分の意志は貫くことが多い	-.113	<b>.483</b>	.006	.205
15:自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない	-.010	<b>.411</b>	-.143	.249
24:良いか悪いかは、自分自身がそれをどう考えるかで決まると思う	.258	<b>.405</b>	-.070	-.031
1:自分で良いと思うのなら、他人が自分の考えを何と言おうと気にしない	-.102	<b>.312</b>	-.134	.099
6:相手は自分のことをどう評価しているかと他人の視線が気になる	.010	-.090	<b>.947</b>	.059
2:人が自分のことをどう思っているか気になる	.115	-.079	<b>.702</b>	-.018
8:他人と接する時、自分と相手との間の関係や地位が気になる	.006	.237	<b>.412</b>	-.252
17:自分の意見をいつもはっきり言う	.090	.086	.006	<b>.636</b>
19:私はいつも自信を持って、行動している	.264	.013	-.113	<b>.538</b>
5:常に自分自身の意見を持つようにしている	-.059	.248	.160	<b>.498</b>
4:自分が所属しているグループの仲間と意見が対立することを避ける	.218	.138	.135	<b>-.440</b>
13:自分が何をしたいのか常に分かっている	<b>.308</b>	.052	-.072	<b>.425</b>
18:何かする時、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある	.112	.134	.266	<b>-.343</b>

	他者 との調和	独断性	他者 評価懸念	個の 認識・主張
【協】他者 との調和	1			
【独】独断 性	.028	1		
【協】他者 評価懸念	.491	-.055	1	
【独】個の 認識・主張	-.092	.424	-.214	1

性には、他者とは異なる自分自身を認識し表現する「個の認識・主張」と、他者に配慮せず自分の判断で行動する「独断性」という下位領域、相互協調性には、他者との対立の回避や協調を重視する「他者への親和・順応」と、他者を意識し評価を気にする「評価懸念」という下位領域が含まれる（高田ら、1996；高田、1999）。

文化的自己観は“23：どのようにしたら周りの人に喜んでもらえるかをまず第一に考える”や“12：人から好かれることは自分にとって大切である”など、「他者との調和（第1因子6項目； $\alpha=.710$ ）」、「7：自分の周りの人が異なった考えを持っていても自分の信じる場所を守り通す”や“9：たいいては自分一人で物事の決断をする”など、「独断性（第2因子7項目； $\alpha=.708$ ）」、「6：相手は自分のことをどう評価しているかと他人の視線が気になる”や“2：人が自分のことをどう思っているか気になる”など、「他者評価懸念（第3因子3項目； $\alpha=.727$ ）」、「17：自分の意見をいつもはっきり言う”や“19：私はいつも自信を持って、行動している”など、「個の認識・主張（第4因子6項目； $\alpha=.654$ ）」からなることが明らかになり、本研究でも先行研究と同様の因子構造が確認された。

木内（1995）は各自己観を一次元上の両極として、2つの自己観の相対的優位性を捉えたが、高田（1993、1999）は一方の自己観が優勢である時、もう一方の自己観が劣勢になる傾向が一方的ではないとして、二次元という捉え方を提示している。そこで分析された因子の素点を合計し相関を求めた結果、相互独立的自己観と相互協調的自己観の間には有意な相関は認められなかった（ $r=-.104$ , n.s.）。よって相互独立性と相互協調性、二つの文化的自己観は相対的に独立した関係にあると言える。

次いで個人を他者とは分離・独立した存在と捉える“相互独立的自己観”と個人の相互作用とつながりを重視する“相互協調的自己観”，2つの文化的自己観とアサーティブな自己表現の関連について性差も含めて二要因の分散分析を用いて検討した。（Table 4）

分散分析は、因子分析で得られた構造に基づいて、“相互独立的自己観”と“相互協調的自己観”の各因子得点を素点で算出し、それぞれの自己観から低群、中間、高群の3群と性別の2群に分けた調査対象者を独立変数、アサーティブな自己表現の各得点（素点）を従属変数にして行なった。

“相互独立的自己観”と性別の分散分析では、アサーティブな自己表現全体の得点に性別（ $F(1,326)=9.99$ ,  $P<.01$ ）と相互独立的自己観（ $F(2,326)=68.44$ ,  $P<.01$ ）の主効果が認められた（Figure 1）。つまり、女性は男性よりも、相互独立性は高いほどアサーティブな自己表現全体の得点が高くなることが認められた。同様にアサーティブな自己表現の下位領域である自己受容・自己信頼では相互独立的自己観（ $F(2,326)=59.39$ ,  $P<.01$ ）の主効果のみが（Figure 2）、

Table 4 性別と2つの文化的自己観によるアサーティブな自己表現の平均値

性別	相互独立性	N	Assertive 全体		自己受容・自己信頼		正当な権利主張		断る意思の表明	
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
男性	独立低群	57	45.47	10.03	20.20	4.87	16.56	4.33	9.00	3.09
	独立中間	51	52.77	8.36	23.09	3.94	19.40	4.13	10.24	3.33
	独立高群	60	57.20	8.51	25.47	4.47	20.50	3.90	11.22	3.01
女性	独立低群	63	47.40	8.66	19.60	4.68	18.08	5.01	9.70	3.18
	独立中間	47	54.43	9.45	23.23	4.43	20.26	4.67	10.94	3.37
	独立高群	57	63.11	8.44	27.23	4.58	23.75	3.85	12.16	3.01

性別	相互協調性	N	Assertive 全体		自己受容・自己信頼		正当な権利主張		断る意思の表明	
			Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
男性	協調低群	61	50.02	11.67	21.97	5.95	18.30	4.90	9.73	3.28
	協調中間	45	52.77	9.06	23.30	4.20	18.58	3.87	10.88	3.36
	協調高群	62	53.57	9.43	23.79	4.39	19.58	4.34	10.38	3.17
女性	協調低群	63	56.71	12.27	24.05	5.88	21.38	5.47	11.29	3.29
	協調中間	53	55.13	9.85	23.00	5.32	20.70	4.57	11.43	3.09
	協調高群	51	51.85	10.07	22.54	5.43	19.71	5.20	9.78	3.45

正当な権利主張では性別 ( $F(1,326)=15.11, P<.01$ ) と相互独立的自己観 ( $F(2,326)=36.18, P<.01$ ) の主効果が (Figure 3), 断る意思の表明では性別 ( $F(1,326)=4.88, P<.05$ ) と相互独立的自己観 ( $F(2,326)=16.19, P<.01$ ) の主効果が認められた (Figure 4)。

“相互協調的自己観”と性別の分散分析では、アサーティブな自己表現全体の得点に性別×相互協調的自己観 ( $F(2,326)=4.51, P<.05$ ) の交互作用と性別 ( $F(1,326)=4.30, P<.05$ ) の主効果が認められた (Figure 5)。交互作用が認められたため、単純主効果の検定を行った結果、相互協調的自己観の低群において性別の単純主効果が有意であった ( $F(1,326)=12.23, P<.01$ )。つまり、相互協調性が低く、周囲と調和を取らず他者からの評価を気にしない場合には女性は男性に比べてアサーティブな自己表現を選択しているが、相互協調性が高まるにしたがって性別による違いが見られなくなり女性はアサーティブではなくなる。同様に自己受容・自己信頼でも性別×相互協調的自己観 ( $F(2,326)=3.06, P<.05$ ) の交互作用が認められたため、単純主効果の検定を行った (Figure 6)。その結果、相互協調的自己観の低群において性別の単純主効果が有意であった ( $F(1,326)=4.77, P<.05$ )。断る意思の表明でも性別×相互協調的自己観 ( $F(2,326)=3.13, P<.05$ ) の交互作用が認められたため、単純主効果の検定を行った (Figure 7)。その結果、相互協調的自己観の低群において性別の単純主効果 ( $F(1,326)=6.93, P<.01$ ) と女性において相互協調的自己観が低群・中間群と高群の間で単純主効果 ( $F(2,326)=4.04, P<.01$ ) が有意であった。正当な権利主張では性別 ( $F(1,326)=11.19, P<.05$ ) の主効

大学生のアサーティブな自己表現と文化的自己観

アサーティブ行動		相互独立的自己観			
		独立低群	独立中間	独立高群	全体
性別	男性	45.47	52.77	57.20	51.89
	女性	47.40	54.43	63.11	54.78

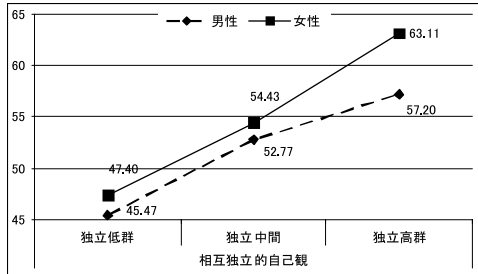


Figure 1 相互独立的自己観によるアサーティブな自己表現の得点

自己受容・自己信頼		相互独立的自己観			
		独立低群	独立中間	独立高群	全体
性別	男性	20.20	23.09	25.47	22.97
	女性	19.60	23.23	27.23	23.20

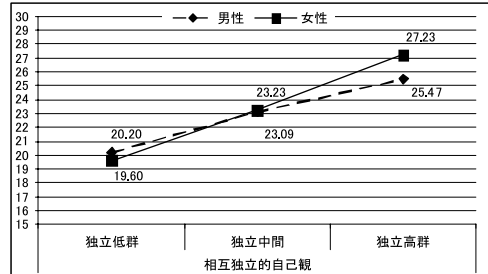


Figure 2 相互独立的自己観による自己受容・自己信頼の得点

正当な権利主張		相互独立的自己観			
		独立低群	独立中間	独立高群	全体
性別	男性	16.56	19.40	20.50	18.81
	女性	18.08	20.26	23.75	20.67

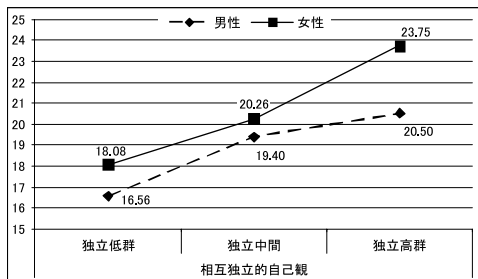


Figure 3 相互独立的自己観による正当な権利主張の得点

断る意思の表明		相互独立的自己観			
		独立低群	独立中間	独立高群	全体
性別	男性	9.00	10.24	11.22	10.17
	女性	9.70	10.94	12.16	10.89

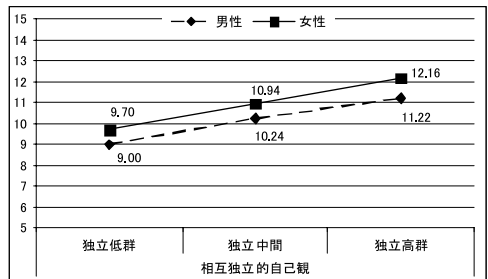


Figure 4 相互独立的自己観による断る意思の表明の得点

果のみが認められた (Figure 8)。

相互独立的自己観とアサーティブな自己表現の関連について、概ね相互独立的自己観と性別の主効果（自己受容・自己信頼を除く）が確認された。相互独立性が高いほどアサーティブな自己表現を選択していることは、アサーティブネスが個を大切にして、自己の思考や感情、権利を優先する西洋文化で誕生したことからも説明できる。また核家族化や少子化が進み、日本社会は個の独自性を重んじる相互独立的な文化へと変化したとも考えられる。

相互協調的自己観とアサーティブな自己表現の関連については概ね相互協調的自己観と性別の交互作用（正当な権利主張を除く）と性別の主効果（自己受容・自己信頼、断る意思の表明を除く）のいずれかが確認された。しかし、相互協調的自己観の主効果が認められなかったこ

アサーティブ行動		相互協調的自己観			
		協調低群	協調中間	協調高群	全体
性別	男性	50.02	52.77	53.57	51.89
	女性	56.71	55.13	51.85	54.78

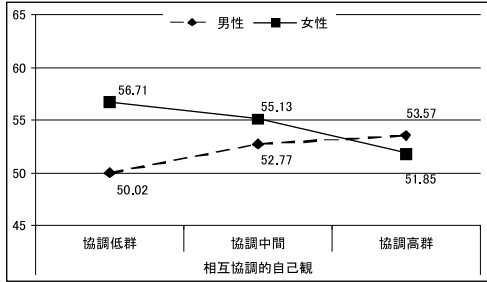


Figure 5 相互協調的自己観によるアサーティブな自己表現の得点

自己受容・自己信頼		相互協調的自己観			
		協調低群	協調中間	協調高群	全体
性別	男性	21.97	23.30	23.79	22.97
	女性	24.05	23.00	22.54	23.20

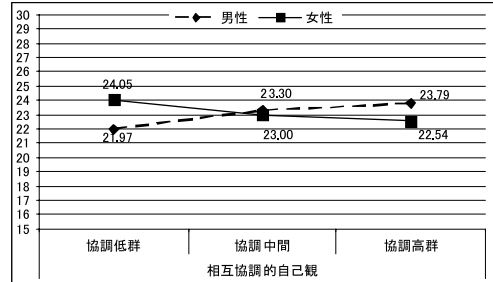


Figure 6 相互協調的自己観による自己受容・自己信頼の得点

正当な権利主張		相互協調的自己観			
		協調低群	協調中間	協調高群	全体
性別	男性	18.30	18.58	19.58	18.81
	女性	21.38	20.70	19.71	20.67

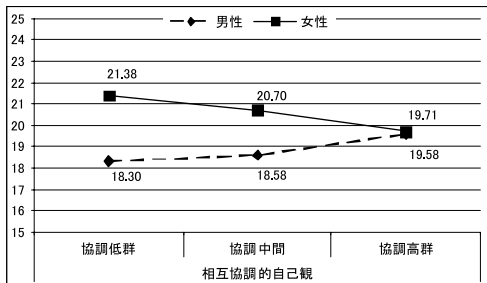


Figure 7 相互協調的自己観による正当な権利主張の得点

断る意思の表明		相互協調的自己観			
		協調低群	協調中間	協調高群	全体
性別	男性	9.73	10.88	10.38	10.17
	女性	11.29	11.43	9.78	10.89

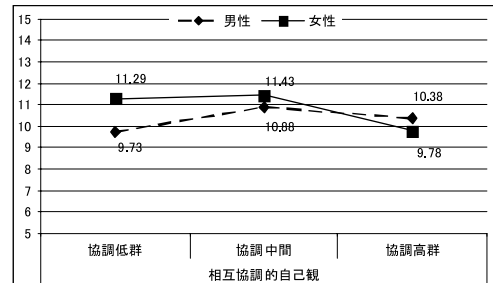


Figure 8 相互協調的自己観による断る意思の表明の得点

とから、アサーティブな自己表現には従来考えられてきた相互協調性のみの関連は低いように考えられる。日本を含む東洋文化では相互協調性が優勢であり、社会生活や自己表現に影響を及ぼすと考えられてきた。しかし、相互協調性とアサーティブな自己表現の関連の低さが示唆された本研究は新たな日本文化の姿を映し出しているように思える。それは他人への“察しと思いやり”を尊重していた自己犠牲的な自己表現から、自己と他者を尊重するバランスの取れた自己表現へと変化したものであり、決して調和を軽んじている訳ではないだろう。

また性別とアサーティブな自己表現の関連について、本研究では女性は男性に比べてアサーティブな自己表現を選択しているという先行研究とは異なる結果が示された。これまで女性の自己表現は伝統的に従順で受身的であることが理想とされる日本文化の中で、特に意見や主張

をすることが周囲から受け入れられなかった。欧米では1960年代以降、男性による支配的な関係を打ち破り、本当の女性のあり方を追求するウーマンリブが到来し、アサーティブネス誕生の契機の一つになった（佐藤，2010）。日本においても近年、女性たちは社会進出を果たし、男性と平等に自分自身の意見を発信する立場を獲得している。こうした時代の変化が女性のアサーティブな自己表現を後押ししたのではないだろうか。一方では自分自身のはっきりとした意見が持てず、優柔不断な自己表現を選択する男性が増加しており、本研究が示す自己表現の逆転が生じたように考えられる。

### まとめ

本研究ではアサーティブな自己表現の構造を確認し、2つの文化的自己観の関連について検討することを目的に挙げた。アサーティブな自己表現は潜在的な認知面としての「自己受容・自己信頼」と、顕在的な行動面として自分から他人に表現する「正当な権利主張」、他人の表現を尊重し、必要に応じて自分の気持ちを応答する「(依頼や要求を)断る意思の表明」に分けられた。

また、アサーティブな自己表現と2つの文化的自己観の関連についての検討では相互協調性との関連は弱く、相互独立性と性別の関連が強いことが示された。多くの先行研究では、日本文化が“相互協調的自己観”を重要視するものであった。しかし、本研究は現在の日本人が相互協調的な心のあり方や生き方を必ずしも好ましく受け入れているわけではないこと、日本人にとっての相互協調性はあくまで文化的に「共有」された信念であることを主張する橋本(2011)の結果を支持するものであった。

### 引用文献

- Alberti, R.E., & Emmons, E.L. (2008). *Your Perfect Right : Assertiveness and Equality in Your Life and Relationships*. San Luis Obispo, California : Impact Publishers, Inc.  
(アルベルティ, R.E. & エモンズ, E.L. 菅沼憲治・ジャレット純子(訳)(2009). 自己主張トレーニング 改訂新版 東京図書)
- 土居健郎(1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 濱口佳和(1992). 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 教育心理学研究, 40, 224-231.
- 長谷川直宏(2005). 自己呈示行動における文化的自己観の影響 社会心理学研究, 21, 44-52.
- 橋本博文(2011). 相互協調性の自己維持メカニズム 実験社会心理学研究, 50, 182-193.

- 平木典子 (2008). アサーション・トレーニング—自分も相手も大切に自己表現— 至文堂
- 古市裕一 (1995). 児童用主張性検査の開発 こころの健康, 10, 69-76.
- 飯長喜一郎 (1995). たくましい社会性を心理臨床の立場から考え直す 二宮克美・繁多進 (編) たくましい社会性を育てる 有斐閣選書 pp. 153-170.
- 石川芳子・小林正幸 (1998). 資料 小学校における社会的スキル訓練の適用について—小集団による適用効果の検討 カウンセリング研究, 31, 300-309.
- 伊藤弥生 (2001). 日本におけるアサーション像の探索的研究—アサーション・トレーニング参加者の個別面接を土台に 心理臨床学研究, 19, 410-420.
- 柏木恵子 (1992). 子どもの「自己」の発達 東京大学出版会
- 北山忍 (1994). 文化的自己観と心理のプロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山忍 (1998) 自己と感情：文化心理学による問いかけ 共立出版
- 木内亜紀 (1995). 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the self : Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 小此木啓吾 (1979). モラトリアム人間の心理構造 中央公論社
- Ree, S., & Graham, R.S (1991). *Assertion training : How to be who really are*. London : Routledge.
- (リー, S., & グレイナム, R.S. 高山巖・吉牟田直孝・吉牟田直 (訳) (1996). 自己表現トレーニング—ありのままを生きるために— 岩崎学術出版社)
- 佐久間路子 (2000). 多面的自己—関係性に着目して お茶の水女子大学人文科学紀要 53, 221-232.
- 佐久間路子 (2002). 幼児期・児童期における関係的自己の発達 人間文化論叢 (お茶の水女子大学大学院) 3, 33-44.
- 佐久間路子・無藤隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, 51, 33-42.
- 佐藤哲康 (2003). Assertive 行動の構造と心的エネルギーの関係 立正大学心理・教育学研究, 1, 25-37.
- 佐藤哲康 (2007). 消極的な対人関係を取る大学生への REBT アプローチを介入に用いたアサーション・ロールプレイング REBT 研究, 1, 29-42.
- 佐藤哲康 (2010). アサーティブネス 菅沼賢治 (編) 現代のエスプリ REBT カウンセリング ぎょうせい pp. 141-152.
- 菅沼憲治 (1994). アサーティブ行動の構造に関する因子論的研究 千葉商大紀要 31, 19-46.
- 菅沼憲治 (2011). アサーション・トレーニングの効果に関する実証的研究 風間書房
- 高田利武 (1999a). 日常事態における社会的比較と文化的自己観—横断資料による発達の検討— 実験社会心理学研究, 39, 1-15.
- 高田利武 (1999b). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程—比較文化的・横断的資料による実証的検討— 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的一相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- 高橋均 (2006). アサーション尺度の現状と課題 心理臨床学研究, 24, 606-614.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 (2001). 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 221-232.
- 玉瀬耕治・馬場弘美 (2003). アサーションに及ぼす場の認知の影響に関する研究 教育実践総合センター



大学生のアサーティブな自己表現と文化的自己観

研究紀要（奈良教育大学），12，43-50.

吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊（1982）. 児童の自己呈示の発達に関する研究 教育心理学研究，30，  
120-127.